

市民のページ

お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに關連することなどを紹介していきます。

その4 八重と戊辰戦争の始まり

長州藩が京都の御所に

攻めいった「禁門の変（蛤御門の変）」から3年半が過ぎた1868年の1月のことです。京都の鳥羽伏見街道で旧幕府側・会津軍と、長州・薩摩軍（西軍）が激突しました。戊辰戦争がついに始まったのです。この戦いで、八重の弟・三郎は、命を落としました。その後、戦線は次第に会津に近づき、8月23日の早朝、西軍は荒波のごとく滝沢峠を一気に下り、午前7時ごろには城下に迫ってきました。

この時、山本家では、八重と母のさく、覚馬の妻・つらとその娘のみ

ねの女所帯でした。城下の婦女子たちは、割場（旧学鳳高校の地）の早鐘が鳴ったら、三ノ丸の埋門から入城するという手筈になっていました。しかし、さくとうらは「女は城中の足手まといになり、空しく食糧を戴くのは不忠になるから、他に避難しよう」と提案します。八重は、さくたちの意見に反対し、「決死の覚悟で入城します」と言い、意見が真っ二つに分かれました。

した。ちょうどその時、「入城のお触れに来た侍が、城中で男が婦人の仕事をしていては、戦闘力が減りますから、ぜひ城中のお手伝いを」と八重に同調したため、山本一家は入城することに決しました。

八重は、戦死した弟・三郎の形見の着物と袴を身に着け、大小の刀を

差し、元込七連発銃を肩にかついで入城しました。弟の敵を取る、自分自身が三郎という心持ちで、一つは主君のため、一つは弟のため、命の限り戦う決心であった」と、後にこの時の心情を語っています。八重たちは、埋門から廊下橋を渡って入城しました。この時、藩の主力部隊は、ほとんど国境に出ているため、城内は婦女子や老人しかいない、心もとない状況でした。入城した婦女子たちは、皆懐剣を持ち、いざというときは、自刃する覚悟であったといわれています。

▼監修：会津歴史考房主宰・野口 信一さん



帯刀姿の八重（同志社大学提供）

この写真は、戊辰戦争の際に入城したときの姿を再現して、八重が56歳のときに撮影されました